

## 長野県下伊那郡喬木村、鬼ガ城山鉱山の調査報告

久保田 賀津男\*

Reports of the Onigajo-yama mine, Takagi village, Nagano  
Kazuo Kubota\*

\*〒395-0807 長野県飯田市鼎切石4381

昭和10年代、鬼ガ城山頂直下で鉄鉱石の試掘が行われた。しかし、試掘で終わってしまいその後探査が行われなかったことから正確な位置が不明であった。また、鉱山の歴史的経過や露頭周辺の地質についての記録等も一切残っていない。今回、聞き取りから得られた情報を元に調査した結果、鬼ガ城山頂直下の南西面（標高約1380m）において鉱山跡の露頭を確認することができた。露頭およびズリから磁硫鉄鉱を含むスカルンが発見されたことから、鬼ガ城山鉱山はスカルン鉱床であると判断した。

キーワード 鬼ガ城山、スカルン鉱床、磁硫鉄鉱

### 1. はじめに

鬼ガ城山は、伊那山脈西面の前衛峰である（図1）。山頂直下の南西面の金山地籍（元島安幸氏・元島智長氏）には、昭和10年代に鉄鉱石の試掘が行われた露頭が残っている。当時の関係者が全員亡くなっているため、地元の、ごく限られた人々の記憶を頼りに調査を行い、その露頭を確認した。鉱山はスカルン鉱床で（田中良氏・手塚恒人氏）、磁硫鉄鉱を含む鉱石を採集した。ここでは確認した露頭の記載と聞き取りから得られた鉱山の歴史をまとめることにする。尚、鉱山名はなかった（元島安幸氏・多田辰三氏）ため、鬼ガ城山鉱山と仮称する。

### 2. 鉱床発見までの経緯

「昭和12年（1937）ころ、東京の会社（社名は不明）の社員が喬木村内に調査して、鬼ガ城山周辺に鉄石（地元での鉄鉱石に対する呼称）があることを確認した。その後この会社が、氏乗から千代にかけての山を買って（あるいは入山権を取得して）、本格的な調査を始めた」（市瀬一人氏）。

氏乗では本谷地籍や、鬼ガ城沢川・魚止めの滝右岸落ち口などで調査が行われた。魚止めの滝では3日間くらいを要して、ボーリングに似た調査を行ったそうである。この穴は現林道大島・氏乗線の工事で埋まってしまったという（市瀬氏）。

鉱床の発見者は岩手県出身の多田伝四郎氏であると

いう説もある（元島安幸氏・多田辰三氏）。伝四郎氏の旧姓は不明である。氏乗の多田家に入り、多田姓を名乗ったが、戦後の開拓で滋賀県方面に移住をして、当地で亡くなられたという（多田辰三氏）。鬼ガ城沢川で鉄石を拾った伝四郎氏が、転石の中にこれを捜しながら鉱床にたどり着いたということである（元島安幸氏）。

しかし市瀬氏によれば、伝四郎氏は東京の会社に雇われた、東北出身者から成る人夫のひとりであったという。

### 3. 試掘

「地元の木下某氏（名前を思い出せない）が人集めをして、木下氏・萩原辰男氏・私の父の3人が雇われた。これに東京の会社に雇われて来た東北出身者4～5人のうちの、伝四郎さんともう一人が加わり、合計5人で試掘が始まったという。作業用の宿泊小屋は栃城沢二俣（仮称）の約50m下流右岸にあった。付近の萱で屋根を葺いた、広さ10畳余のもので、風呂が付いていた」（市瀬氏）。

当時は上村程野と喬木村小川を結ぶ竜東索道が稼動していた。「試掘で出たサンプルを、社員の人が索道で東京の会社に送ったと聞いている」（市瀬氏）。

鬼ガ城山では標高1150mを境にして傾斜が強くなり、沢では滝が現れる。作業道はこれを避けるため、二俣の上流で沢を離れ、斜面を九十九折りの坂道で上って

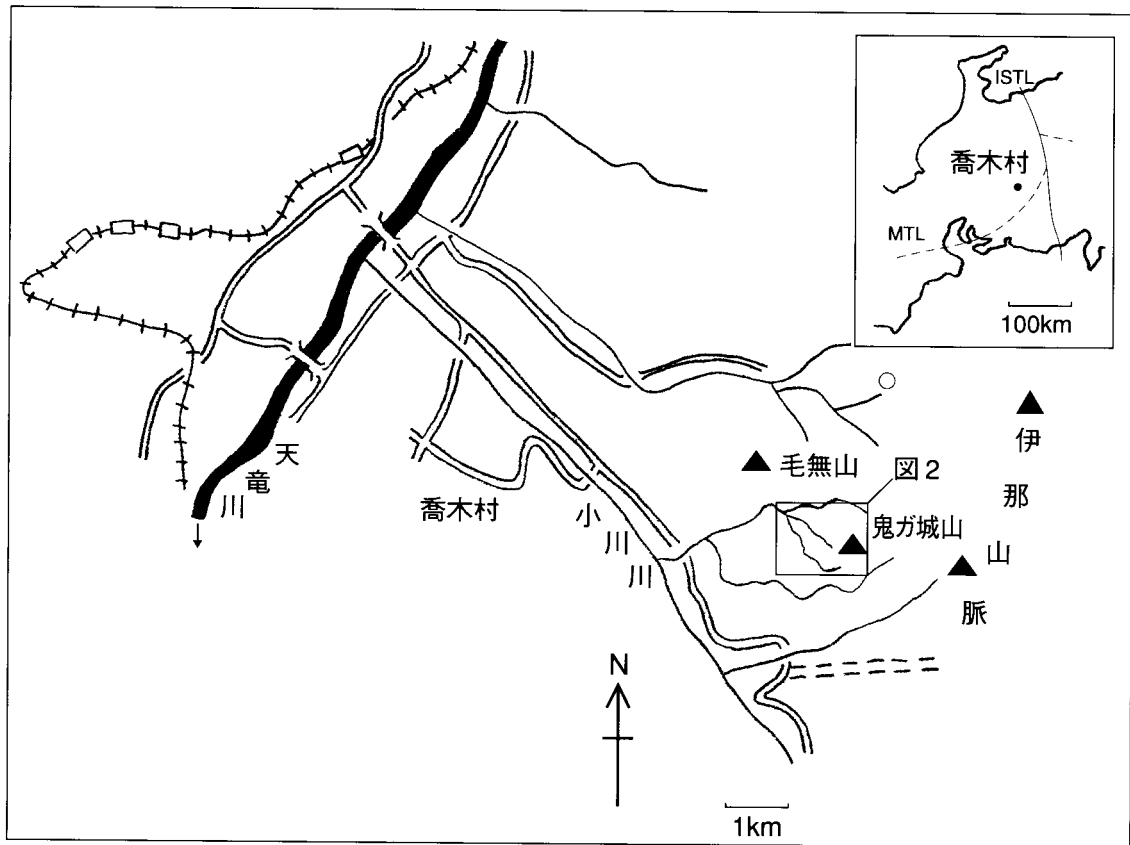


図1 鬼ガ城山位置図

いたらしい (市瀬氏)。この道は現存しない。

「試掘は夏の間、長くても半年くらいだったと思う。思ったほど鉄石の量がないので、ズリ出しをする前に止めたらしい」(市瀬氏)。「試掘が行われたのは昭和15～17年(1940～1942)頃だった。ダイナマイトで岩盤を穿っていたと聞かすが、鉱体が小さくて採算に合わなかったのだろう。ズリ出しをする前に閉山になったと聞いている。竜東索道で、大屋敷停留所まで運搬用の手押し車(一輪車のようなもの)や作業道具を運んだものの、最後まで使われずにあった」(元島安幸氏)。

#### 4. 鬼ガ城山鉱山

調査では枋城沢をつめて、金山のガラ場を直上するルートを探った(図2, 図3)。このガラ場には発破作業で飛ばされたと思われるスカルの転石が多く見られる。ここで採集した標本には磁硫鉄鉱・閃亜鉛鉱・灰重石・輝水鉛鉱等が含まれていて(田中氏・手塚氏)、その含有量は鉱床露頭のものより多い。

ガラ場の南東側には滝沢花崗岩の岩場を連続させた尾根が、沢筋に沿って延びている。ガラ場を約200m登ると、変成岩の一枚岩に出る。鬼ガ城山鉱山はこの上になる(図3)。

鬼ガ城山鉱山には、

- ・変成岩のすぐ上にある鉱床B
- ・その約10m上の鉱床A
- ・Aの東側約15mにある鉱床C

の3つの露頭が残っている(図3)。「鉱床Bを試掘した後、鉱床Aの試掘が行われた」(市瀬氏)というが、坑道は鉱床Aにあるのみである。ここでは特に断らない限り、鉱床Aを鬼ガ城山鉱山の対象として扱う。

鉱床は高さ約3.3m、幅約9mのオーバーハングになっている。坑口はその中央に、高さ約0.85m、幅約1.4mの四角形で、ガレの堆積した地表から約2.2m高い所に開いている(図4)。坑道は短く、N40W方向に約2.6m延びた後、右に折れ、N50W方向に約2.2mで行き止りになる(図5, 図6, 図7)。これは坑口から約2m掘った所で滝沢花崗岩に変わったためであろう。

坑口の東側はスカルンで、単斜輝石とガーネットから構成される(田中氏)。西側はミグマタイトで、その岩相境界には花崗岩の岩脈が約20cm幅でのびている。ミグマタイトの基部は不明瞭な岩相境界でスカルンに変化する(図4)。

ガラ場と鉱床Aで採集した標本を比較すると、比重はガラ場の転石が約2.70に対して、鉱床Aのものは

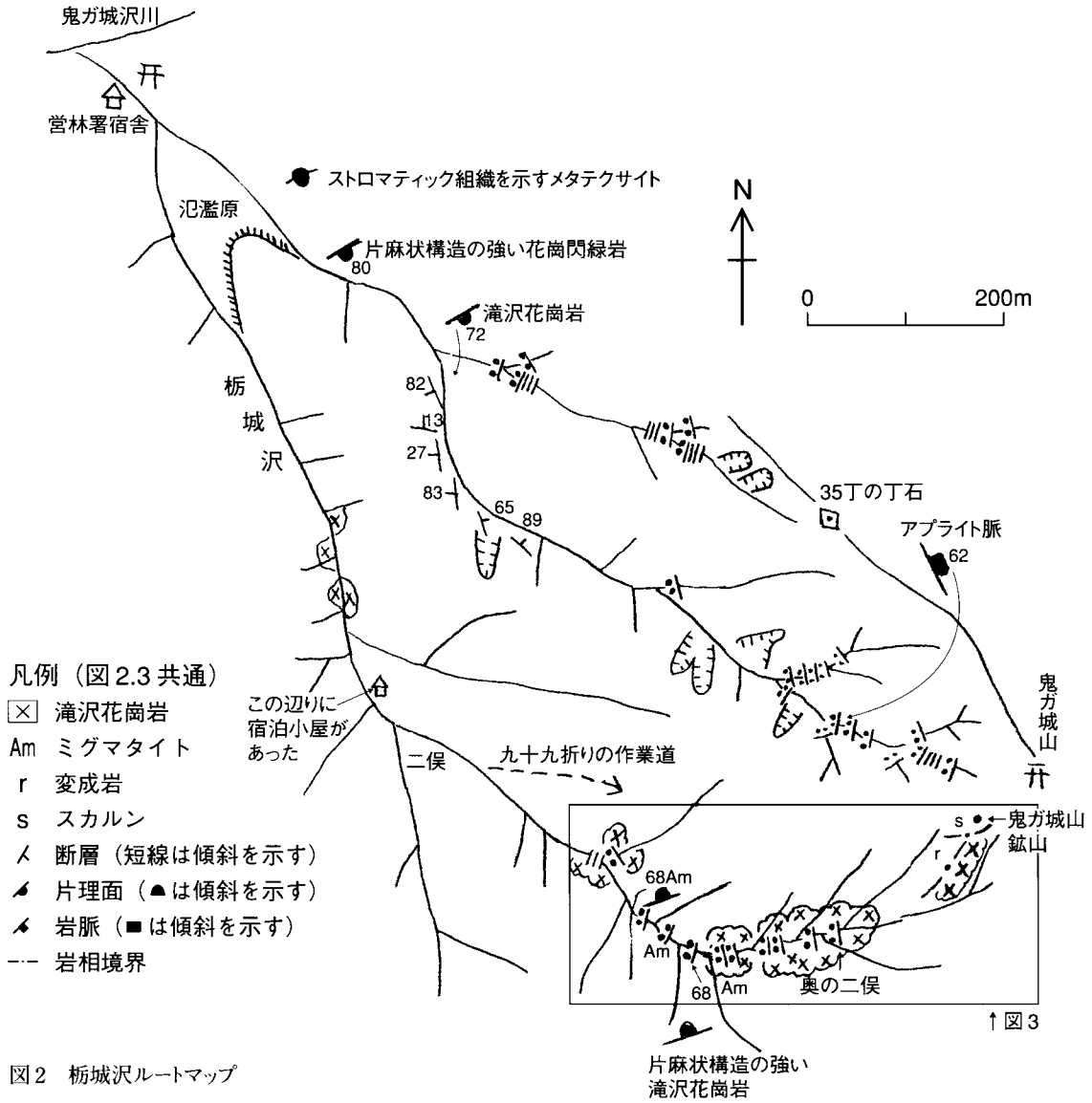


図 2 枋城沢ルートマップ

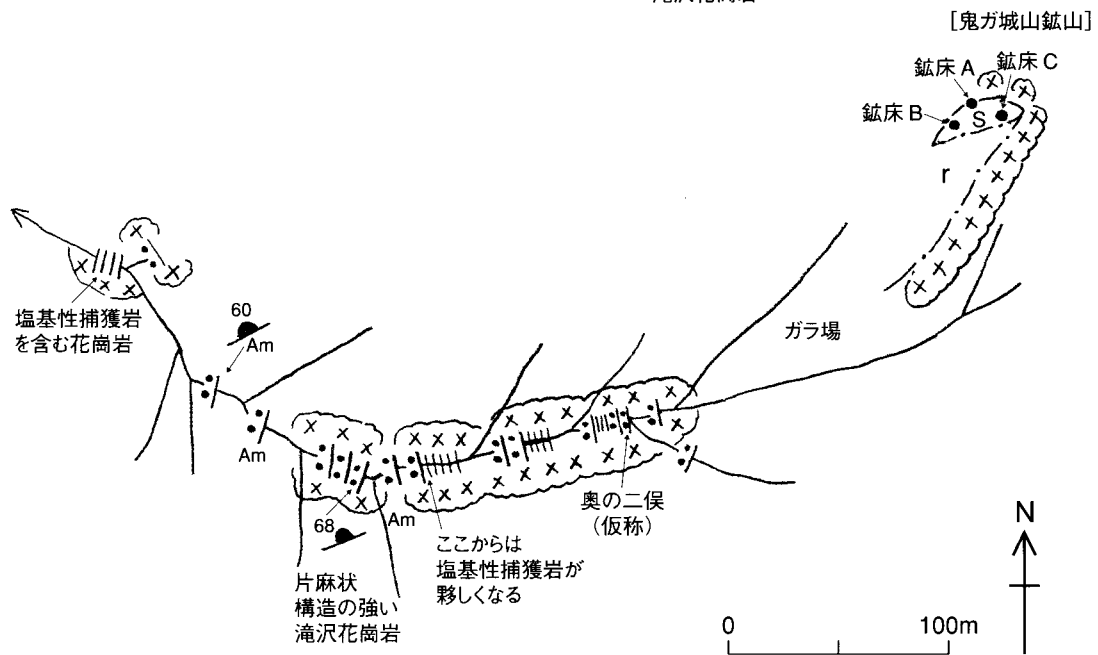


図 3 枋城沢源流ルートマップ

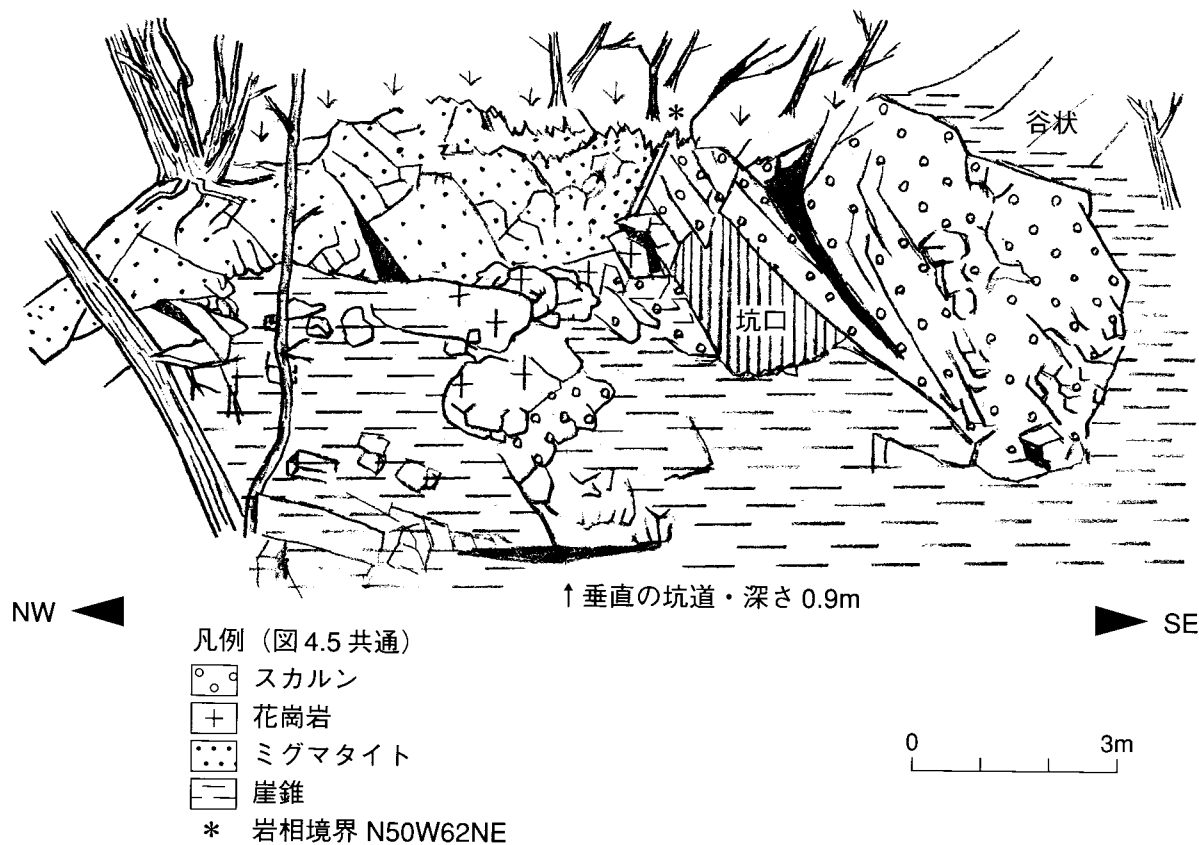


図 4 鉞床 A 露头スケッチ

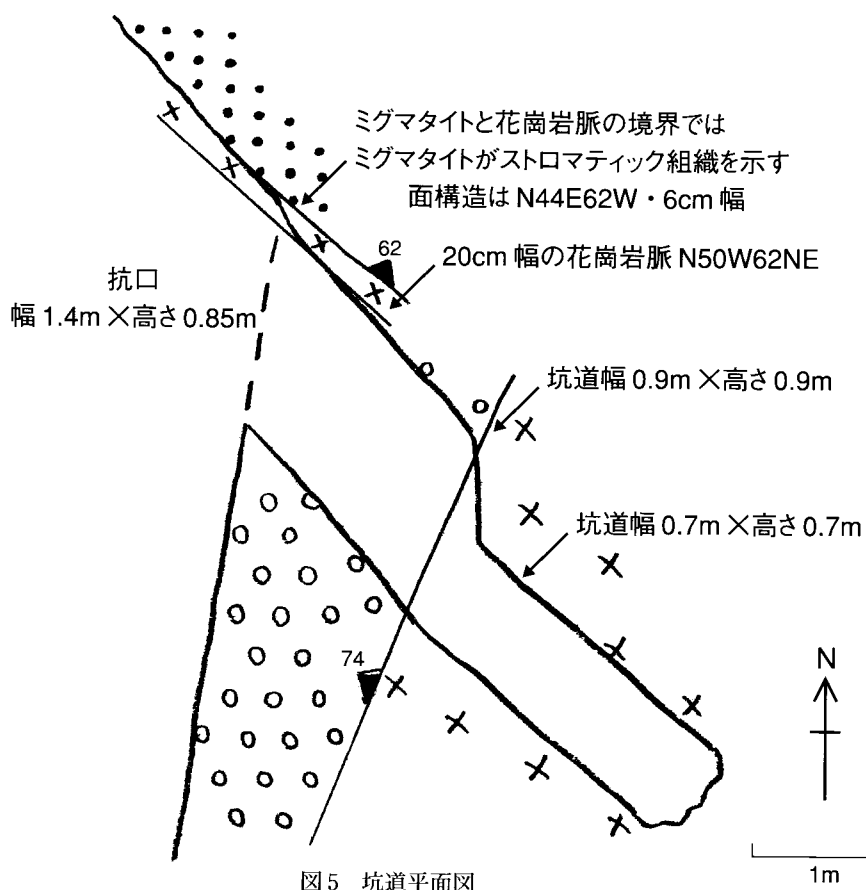


図 5 坑道平面図



図6 坑道の様子 (松尾研氏 撮影)



図7 坑道北側壁面の岩相境界 (矢印をむすぶ線) 右:花崗岩, 左:スカルン

2.64であった。共に単斜輝石とガーネットから構成されるスカルンで、断面には鉍石鉍物が肉眼で確認できる。但しその含有量はガラ場のものの方が多い。

#### 5. 今後の課題

ここでは鉍山の位置を標高約1380mと推定した。目標物のない、広葉樹林帯であるため、正確な数値を得ることは難しい。GPSや高度計等を駆使して、地形図上に正確な位置を記録する必要がある。

膨大な量の崖錐等によって、岩相境界が確認できなかった。機会があれば明確にしておきたい。

#### 謝辞

記録が皆無であったにせよ、比較的短期間で露頭が発見できたのは、御助力いただいた方々のお陰である。聞き取りにご協力して下さった元島安幸氏・多田辰三氏・元島智長氏・市瀬一人氏、調査に同行して下さった松尾研氏、御指導を頂いた田中良氏・手塚恒人氏・村松武氏に、お礼を申し上げます。

#### 参考文献

松島信幸・寺平宏編, 1984, 天竜川上流地質図(6) 遠山, 中部建設協会。